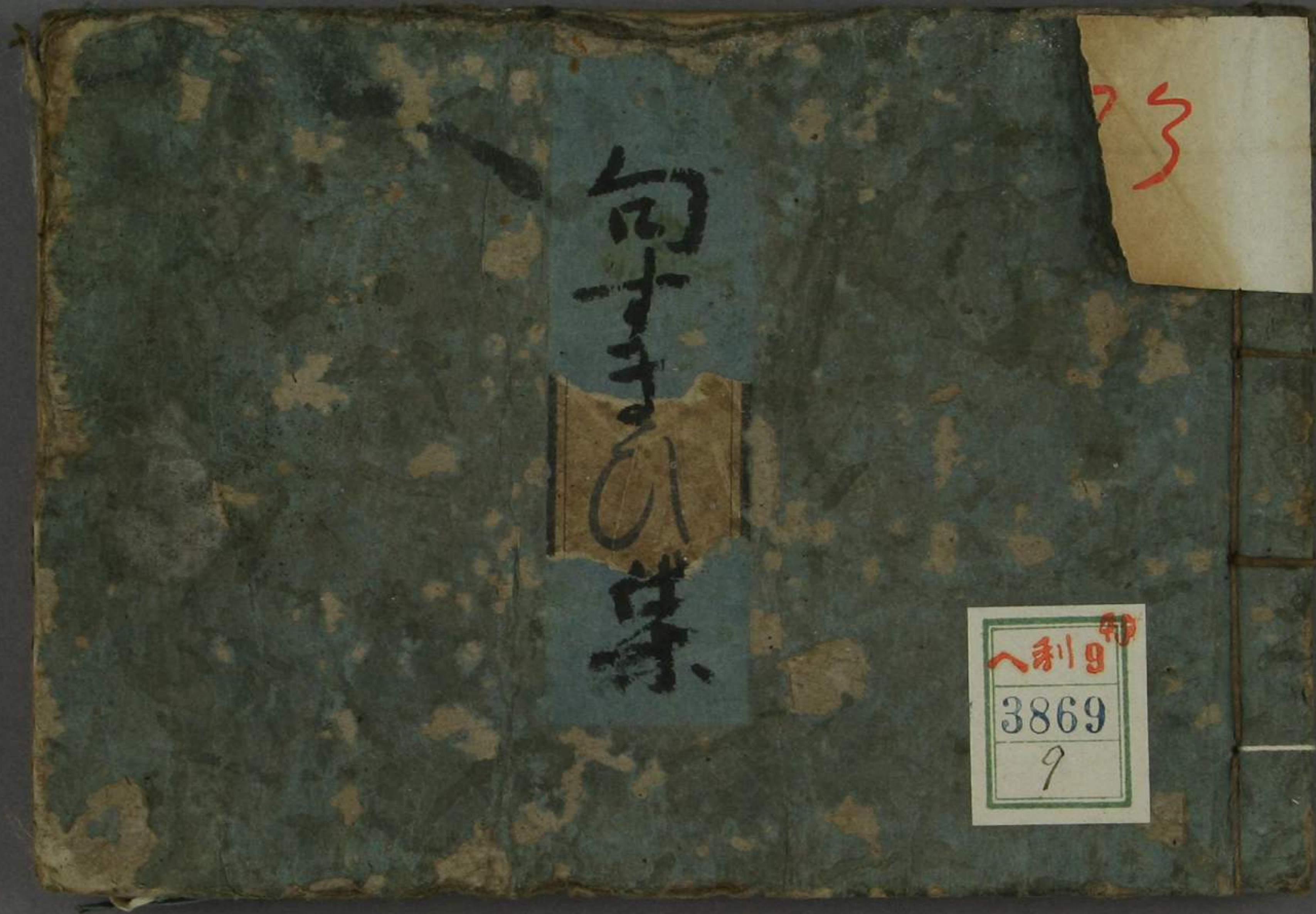




句
集

利 9
3869
9

利 9
3869
7

順折向す

大正七年三月六日
室井平藏氏贈

世々此州家ハむし一箇名
基俊朝臣のあふれしとあり
倉部の子お模ふあふれしとあり
正凡神のちうべんある秋葉と
ひきこる角力山阿子詞小雅
俗の去嫌ひなく務員い四季に
瀧また影四か柱の立方そなた
むきをこく力士達のつと急いど
まふしがたの口千ハ手に虚実
乃重表証さかやゝも滑
新不操の浪是れり司人の團

ひあがしめおとすももも
角力いもあきりぬ勝原けけあ
一旦にまらづうもろくぞあれど
とーやとげそのつゆもあま
かんものつゆ乃華のふあま
に破きあうもろくぞあれど
あめりともあきるふか華
やまに

文化十一のとき
よき詩月

大魯庵れあ

読心
しん

順折句角力集

浪華 十撰

南紀若山

頭取

市丸
士口
新丸

同若山

書記

復月
塵丸
秋月

東方

西方

太關

其分

太關

竹馬

關脇

塵丸

關脇

桃子

小結

如鴻

小結

秋月

前頭

百女

前頭

吉口

同

仙子

同

南北

同

西丸

同

一葉

同

市丸

同

春之

同

可虹

同

多吞

前頭

芳丸

前頭

藤丸

同

馬陶

同

二角

同

白鷹

同

新丸

同

志月

同

山吹

同

杉橋

同

馬連

同

八六

同

天目

同

哥仙

同

春枝

同

露通

同

霞城

同

井筒

同

一扇

同

金鼠

同

政丸

ヒカダ 一才 n
キタレ、 極意 n
ミフシニ 勇梯 n
ヒタカ 林檎 n
ユアサ 一正 n
ヒカダ 吹雪 n
イウミ 兒友 n
魚母 兔丸 n
小町 孤舟 n

黒梅 淺燄 巴 力^カ 之^ヒ 十^ヒ 友^カ 一^カ 性^カ 角丸 有丸

小友 前
シホヤ 五柳 門
ヒタカ 挂雨 門
イソミ 哥丸 門
石カキ 祇林 門
志文 門
シホワ 馬口 門
タテ 右橋 門
イワミ 和玉 門
ヒタカ 三山 門
花月 門
夏月 門

不三 里桂 蘓生 花筆 季旭 三省 芦舩 里蝶 義石 卜丸 芳羅 竹林



三萬堂馬両撰

卷頭

松隈之案ハ同トテ其の母一扇

糸父の短氣大丈ハ吞ミ込メ 里桂

護麻之檀ハ百言多に進メ教テ一州

ぬ踊りの供トシテトモ 仙子

睡乞叮嚀トシテ泣クモ 無性

唾も茶後合ハ括テ智恵トス 士口

ヤト同ハモ解メテお縋子帯 桃子

客は来テ一ツ首の出ル迄 塵瓦

山樞杵トシテお祈アリ 芳羅

大男頼是るの智恵者の南北
御近習れ紋を垂れおろし 全
乞ふ抱ふを無理より面白 一葉
り襟抱ふのむせり乳の張可虹
小浦を泳ぐ地えへ揺揺る兜
小判で物の不自由の奥山家 全
母の慈が終末年の大ケ時
仲人分はふきの雨傘 ヤド 可仙
子に抱ふ抱ふ似合ふて老初る市丸
約束れ袖 キヨト りきや敵替る 其刀

押おるる雄たけに思の母 全
多し用ふいつつもい丁度 如 如鳥
世乃末ハ可憐系 志 建れ 志月
師の義我授る日から句梅 聖
井の隅より顔もあめ次 塵丸
浪子抱ふは吾病をなす 市丸
七用下ふぞん 遊 遊 遊章
源氏清くも枕抱ふ 馬 馬 馬連
布さしに何れ名訓の 塵 塵 塵丸
す早め其名に 花 花 花筆

そま申に秋の夜は秋の夢一扇
机火の居るやうな僧披袈西丸
方三つゝ居る程の大出世杉橋
あむ描きあひぬの根の負士口
夜中れ眠る琵琶の音を小町
面をいさめるまで血酔の奴仙字
家庵の居るに飲み酒を金風
折るつゝはくさくに教様其方
伏え足よと語り一間の女護の語多春
屋根の上にと紙か井戸堀政丸

踊り大勢あるやチャット知り白鷹
代傳りふ書の数入り全
大三十日只しごとく急行寺芳丸
縄を通し主役の昌浦ち白鷹
金拂ひムクくと居候と全
四季草屋は浦お茶の二本佩馬重
源が実かぬち逢ふ時其方
忍火お茶の二月とよき乃子鹿塵丸
茂理つて退きあひのち逢花筆
朔日ふけりやうと語り母新丸

瀟湘の只の女や字をてなつ天目
家五虎を魂棚つて後の書可虹
拂ふの有りそふお罵さう杉橋
廁ふ百工解も振り袖義石
末代格とぬかちるの書辭多春
風さうさう先生日本記秋月
草花の夜やき居つて寂侘り竹馬
いあつて瘡のさかんす占秋月
おろお子抱てぬの志我志春枝
小原女の来は来上乳のこほる春之

何の守腎虚て死ても有豊馬陶
言肩の勢もして雨の雨の不二蘊生
大向を大夫の勢もしてある蠢
波し浅たんと勢もしてある復月
矢種のもつてある金掛春之
男伊を連ね人のへたや勢もして馬陶
おろおとつてある古木稀塵
傾城のまて注合と方今集今
式法ふ定笑顔のふ眼調南北
前と後ハ要害の印と垢仙字

名紙晒 蕨墨堂あをば 夏月
親乃世ふ建ふハ子小サハ 不二
招佩をまてをそめがけ 雲霞 金風
焼くハ 嗚ても 難をえ 愈い 其刀
縋子の帯 刺し 延て 女房 旬 里 友
門よ 夢ふ 交して 虫を 客 桂 西
佛祈禱 延て 夢を 外母 可 夢り 夏
仲人の状を 夢り 小 性 也 秋 月
小判 ち 持て ぬを 縋に 親 茂 夷
さる 夢も 振 向 けし 梅 夢 桂 西

関イと云今役ふまむ 夢中 如 鴻

卷軸

佛治世のもめ 夢り 小 性 也 秋 月

浪花坊 蘆 旧 撰

巻頭

思ひ 夢り の 夢 夢 の 夢 夢 に 夢 夢 義 石
科 夢 夢 の 夢 夢 懐 氣 の 掃 随 馬 陶
布 夢 夢 の 夢 夢 の 夢 夢 の 夢 夢 塵 瓦
丸 夢 夢 の 夢 夢 の 夢 夢 の 夢 夢 一 正
小 判 夢 夢 の 夢 夢 の 夢 夢 の 夢 夢 二 角
丸 握 夢 夢 の 夢 夢 の 夢 夢 の 夢 夢 右 橋
宿 遠 入 傍 夢 夢 の 夢 夢 の 夢 夢 桃 子

金泥の香やとまなふ氣は
 秋の夜合を隔てて鐘竹馬
 親の聲はおぼろけ苦思ふ杖又笑
 その日南の樹と病より其方
 月夜を越え伊達酒を呑み芳丸
 関き後日夕吹のそ撫去 秋月
 我ら苦味助を酒を呑み過じ薨
 呵られふ人ありと悟る竹林
 とらふもあやふと死し山嵐
 臨末の粹のとりても侘秋贅

男氣を欺されて我を存新九
飯喰ふまの庄新ある塵
拂と人の有らん一の里根杉橋
七化の仕舞ふく尼あり市丸
三三傳ありあて緋天機織る其分
我事あり大新ては海の母新九
仲人し知ぬ疵あり有る海流無性
厚川より拍の解め嬌りさ市丸
大算ふ短氣を留て小いふる哥丸
一旦の手切は海の中より井筒

首尾合意して夢遊次第 桃子
縫物の如くを成し篠の梅 志月
年と若く女房の情ある事 如鴻
数通ある事 息子愛小友
おのゝてある振お朝の町外 新丸
母おふ懐くまで孫を 塵丸
めへ譲り向られ簪簾一羽 鐘堦
あついでいひてめおの智恵と 井筒
おのゝいふ事おのゝ事 孤舟
おのゝいふ事おのゝ事 可仙

那まふたふ連と云にさ地有巴
 嫁の顔きとそれきふ家貫之
 男氣の出されぬ物ふふの年友志
 氣上五智の強ん女の家世五柳
 紗布うら出ス百目有梅春枝
 子供氣つ戻元朝の光夫婦秋月
 無きやその心あふま生にのみ百有桂西
 後入の書ふ地草の入佛事祇林
 二ありいの世提と親子連芳羅
 おも妹の二角張のこ登井筒

軒を渡り月を影にさし如鴻
鍾鐃を打て居る傾城のまゝ可仙
後へ去り付て居る端のまゝ市丸
盗人を知らずもの品々多々
おま中にまゝ居るまゝ蓬萊可仙
福者の女房まゝの毫其刀
可愛男の無理の嬌い暗雲
おまゝ丁次口上何やら竹馬
みづつみ紙富路のまゝ女房仙
吹付合ふて樹乃恵風春之

窓まゝ上子紙入る珠敷遊童
楊貴妃の兄まゝ此で鞠振可虹
上子之七加減よりおま加減
源氏まゝあれまゝに別まゝ桃
恋をまゝおま振る踊のまゝ市丸
まゝ地のまゝおま井門まゝ一葉
おま瘦りておまおま井筒
子の耳おまおま有る法々塵丸
恵めおまおまのまゝ鬼瓦霞城
真顔て浦を囁に皮切十六

驚かす有り迎道に逢ふ小友
屍をくもる漢人もそぞろに秋月
いふく藤の葉をけし白全
花名をおる侍女も是全
以来も高に書かぬ市丸
事ありなき也ふ花のよき道其方
大面世代く是ぬ智もて涙芳船
え花のよきぬなり袖繩ふも市丸
ふての病と疾のありるも新丸
毛抜ふも玉のつたてて塵丸

木屋所ふ花と毒しい出で生馬陶
おさめを抱てぬのち我志春枝
向屋ふに似ぬあはれの花の生
はるの能ふるもとててる桃子
鈴飯のよき紙供ふ小角力秋月
あまふもて病をぬき南北
義理もて居るをも母に食ふ風
義理つて居るも男も女も上丸
矢種乃るも所て金柑春之
下女も氣つて居るも其も月

おゆりを所引いと蛇ふぬ塵丸
巾入と戸ふ描の尻形其刀
舌目結妹も氣もぬや無芳丸
何とらも知さぬ妹を浮きう市丸
お基お流るる即ちおしよ小友
泣きても兄弟の瞳と百重の塵丸
閑さうさぬ氣つてもて流る全
心通に操りておれ描め馬口
燕ふぬもあそびおる馬陶
お物を只を自慢の香いや不二

病よりそりく伽つ尻眼より志月
夫婦の裾ふ描の文結九柳
甘うお通りと裾つぬり袖吉口
巻軸何れより垣連るる練着春大

草月庵泰夫撰

巻頭

事毎に才育にけふ無法吉
ぬけぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
嗟嘆て和音拾ひぬぬ黒蝶
きあいのほりぬにけふ愛おふ塵丸
着れ程の衣裳を飽てあは市丸

座持上よりふのそい書あ井筒
障りも似て笑ひる初給書煙
山と續くニヤ紙あり曳秋月
机釣りほの女房は油路あ市丸
名のなるひ世ふ笑あ城あ如鴻
何そ苦みしてふい紙あ切の春其方
大算の短氣も有て小いふそ哥丸
城ま氣のモウもまふ知幼芳丸
跡月経面あふ入て有十六
茅の短氣も懐てふりし紙林

問きうに迎及も有母のそ思一扇
大算の伊豆門只ちこあり百女
能器量有も氣お松岡鐘櫃
廻文消りあ新端のそ秋の護書市丸
姉と氣う合ひ念ひあそぬの井筒
病母つ傍あうを所へる眼新丸
全鼻をまけては流るもそ坊多春
氣を移て医者方付寺男市丸
奈れおと苦み登り日に敵様雄虎
城あのも持ッ大後の大書以塵丸

讀の字は有るも言て終つて其分
等字の付くものなるは雨音馬運
るる人よみの罪を弄つぬ鳥
世を知らずも風も月も馬口
あつて舞ふたつてを眠れ吉口
親をうぢあふ淋しい除ねの鐘其分
流し流したるも殺さるも死ん復月
きつて又もそのまにふねつ花月
蓮もつてふと波めふ歌の百女
流ひつるふ合ふ終つて月志月

鼻怖の時を待つて春の全

おつて合確あつてと秋月
有採女身は去の初給新丸
侍女は力採るてもあつて市丸
ん地能いもの朝日の大湊ミナト春枝
飯之増くやあつて鶴之市丸
男氣の勢ふれて虎に新丸
あつて雨して唐の味仙字
木の松射あつて鉄炮油竹馬
あつたつてと新よ人捕市丸

誘ふ嵐の日の暮のもの右橋
天をふと釣らば是も匠をな塵
笑れ唐梅はけき濁る世墓
男程候り其の骨を討吉
吟声はあふむ津より杉橋
葉のたやまをへりて伺り竹馬
吾て押る瘡はけ居のふ葉芳花
おこ有かりし咲は泣く鐘
名を瞬麻葉をさ青丹は夜月
若返入侍りぬ末は夢の桃子

都上候りて毎年来ぬとい百女
待ねるまゝに待つに秋の夜芳羅
佐とむこ三万目と二階り其刀
仲人の状を聞ぬお性本秋月
罪の海をよへ候城の寂珠八八
病よりそりて他へ眠るす吉月
軒は渡りて次のるは鐘
をふと云ふられし出まは百女
味ふもの費つた大つて秋月
心水ふ梅をそき振める口

極楽のモウ私や吾れ當分其刀
浦の緯を裁縫する市丸
流人もお裁入る百の笑ぐ士口
毛は只の弟子にやらと困え天目
とろそ世をいど利鉄壁右橋
つ着あてやく片さ地の孤花月
桂る諸丁又ある路をい氣張雄席
世するおあり友に勝ちて一正
ぬる玉のえと結つぬ物接秋月
細脈を振じてある遠仕者新丸

最也て南軒の味さりの火雄席
知ろきんて咲の櫃巾雄席
古用丁にしろみお母あり秋月
障子越叫をさるる竹林
招もわりの咲と新あり全
早の陣さくもお女はえ春枝
寢るをさるる吃の方さひん藤丸
暖心座の陣も伊あさ今且志好
寝て有る時うほすり統の袴和玉
小判ていのふり中お妻山家市丸

桃の咲く時とてやや人恋ふ其分
嫁の都きいとてさきまの赤き花
泣きの起るまの原化糖十六
みえねあはれまの筆書き春枝
かみおしとてさきまの赤き花
仲つとてさきまの赤き花
さきまの赤き花
能めさ房の傍るいとてさきまの赤き花
さきまの赤き花
何の守りも虚てさきまの赤き花

納得の信より母の書に越九柳
隣まで女房のいととてさきまの赤き花
親の次まの玉性の力強祇林
座禅の傍るいととてさきまの赤き花
時は風日あはれまの赤き花
さきまの赤き花

鼠六坊巴執撰

巻頭

尾草のてい梅が白くあはれまの赤き花
時におくちまの赤き花
時におくちまの赤き花

ヤシとてお後おつて小便瀧 馬連
客の事て一ぬく時のわきを塵丸
赤き山吹 文書を記す山吹
侍女の肩に佩い懸る鐘カネ 鐘カネ 檀
巾辺習の紙を売らぬり 南北
へ白晝をよみ深で深 南堂坊多香
海 山吹をけり女に碎と偽市丸
今も如船ふ書わのられ露通
手取の女房の懐に書軒如鴻
吾止とまを嬉り一日如一葉

栄花もやき若つては個分り竹馬
大所建立てサア耳イ榮山八六
雉子のつ屋ぞやと命をうけぬ塵丸
赤狗ふまうつ酒を吞はば二角
顔をかめて梅のむくは馬連
ゆら知る事では秋の味八六
七化々の侍弱蟻のわきを塵丸
厨屋の百工聲も振袖義石
代書わきを記すは近か喉とや丸
針を舟ふ核とて渡川二兎

今世ふかある何にもない聖仙子
今世ふりやある對の挑灯桂雨
経病ふたもの發る我者南小
経やう同く傾城の如き種生
此一医者も鼻れの時四極肩百女
子供等が持おむに成た男霞城
長道をきかでいさる米雨衣梳子
仲人をいさる時の雨金其刀
終り候て置候を仕終義
鬼どもも伊きみ色く地獄画塵丸

後世ふかある何にもない聖仙子
今世ふりやある對の挑灯桂雨
経病ふたもの發る我者南小
経やう同く傾城の如き種生
此一医者も鼻れの時四極肩百女
子供等が持おむに成た男霞城
長道をきかでいさる米雨衣梳子
仲人をいさる時の雨金其刀
終り候て置候を仕終義
鬼どもも伊きみ色く地獄画塵丸

あや—国をめぐりし留其刀
大由路南世めりし物とるる市丸
此とれは諸君とむる人蓋
と却の方ありけりふるを—
え集々二夜の夢の跡者執丸
子心つ房つる夢の寂きふる運
訓染ての法ありし物とるる如鴻
跡子おとしき夢の寂き付白尸
稚子をとめて奴のたつ義もの春枝
其るに強き者もつるたつ義李旭

のどや月の大きく一軒屋金風
床にても夢とるる夢の初月秋月
就るに濃しし物とるる沖一眠市丸
千瓢結のくし降口丸の金風
拂人のあやしし物とるる杉槁
し様抱ふものむる乳の強可虹
何んそと上代物とるる秋甘刀
夢人の夢とるる夢とるる吉口
大由路南世めりし物とるる市丸
此とれは諸君とむる人蓋
と却の方ありけりふるを—
え集々二夜の夢の跡者執丸
子心つ房つる夢の寂きふる運
訓染ての法ありし物とるる如鴻
跡子おとしき夢の寂き付白尸
稚子をとめて奴のたつ義もの春枝
其るに強き者もつるたつ義李旭

能病お大将につきのくま様
ふちん様とてあつたし馬口
男氣を立て様あふたふ市丸
いけでもおれ様あふ一狂
あふちん様とて三つ子のねん金風
君とてふちん通ふ人ふちん三山
ふちん様のまふいふれぬいふ可仙
焼うふちん様とてや電鏡甘万
急用ふちん様とていふちん様如鶴
ふちん様とては様とてふちん様

おとあふちん様とてふちん様竹馬
焼うふちん様とていふちん様百女
ふちん様のまふいふれぬいふ可仙
護摩極ふちん様のまふいふちん様塵丸
眺むちん島京のちん様とては様とては様
小神とて毛孫の瞳とてあふちん様二角
新井とて吃の方とてあふちん様塵丸
ぬ国士の章端とてあふちん様井筒
名知とては様とてあふちん様二鬼
何とあふちん様とては様とてあふちん様

あ内連考ああ吟詠各坊其刀
男の子あをうめて乳を吞全
書物あを提を足に遊出全
休て又あ寒の何あて形左秋月
長雪隠尻のああ遊出あ
古御室く年を切り遊二兎
あををああああああああ
あにあああああああああ
ああてかく片さ他のああ月
あああああああああああ

あをを休るあああああ

あああああああああああ

あああああああああああ

あああああああああああ

あああああああああああ

あああああああああああ

あああああああああああ

あああああああああああ

照田素客撰

巻四
病ああああああああああ

洞然と女房はさし初松更夜九
世ふと今も昔者の九裡草
友持女房の妻ふ初松新丸
おふ人へ事をかけし後の髪塵
え控へ女房の白くはつて右橋
兄弟はさる別おふあれ可仙
肩つて上まんと着経止塵丸
内談の事い洩しぬるあふ一扇
折れんつちつとやうにぬれサカ
年にお女房の情ふあふ如鴻

荒の里よりええぬ二挺味秋月
まど飲酒の才に付二十歳首足
親の事の傳にぬるあふ市丸
系鞋てぬるあふあふ二角
氣の手強きあふあふ秋月
ぬるあふあふあふあふ多春
返状と連てあふあふあふ巴
お女房はさし初松更士口
金銀の事いあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふ三山

赤ぬ人にりやと云の言は井筒
 毒なりと言はれられ又酒サカ
 数人の集持の江戸との愚馬連
 鳥をみて物のかゝるサカ
 救医去ふは云ふ常北極二角
 忌の儘でけとせおれ天秤お鬼死
 小利屈を捨て後分つまゝおれ
 戸居菓子にも請ねる毒草上丸
 子持の言と云ふヤおれおれ西丸
 小角力死せりやと物う大キと云

一生を把針て送り形立流士口
 佛りの糸あそぶよさめ流の舞一狂
 とるふか跡城をさる如く金層
 小判をよせの侍女たをさる二角
 能ふ時めをものなる并ねを塵瓦
 内中を流るる糸の礼をさる廿万
 世の垢を洗うる身へ松の風馬陶
 仲居旬の糸の伝をさるる花
 糸をさるるむきさるの桜可仙
 鈴をさるる糸の氣をさるる通新丸

何れ木のりも知るを成事之
言ふを著しりて女府政馬口
棟梁の二代も知りて建塵瓦
走し衆の世のもの仲途 五柳
仁心のおき日照る水吹寄
娘の都元の明程常縁 三連
仙のものを描くは匠より常立 枕子
女の道をきけし 八八はる 不二
飲止まると嬌し 一日一葉
氣に今あるとまゐり丁次のか可仙

萬事料一ふに花をみたり 鳥丸
浪舟ももあてはけは仲余 百女
初息子一の中に子を有る 角丸
こけりしもの男の親子を 露通
傾城の手に衣をまゐる 黒桂
侍女の分神あるも 市丸
援手あると知れぬひちり丸 千所
あつ連を著すは 各坊廿刀
昨ふ影を流るは 二重の 金鼠
相縁を執りて 永く這は 新丸

用つたてまのやう力露通
約束の神すひま破勢の甘力
字の底の今にふを叮嚀お一正
み形ゆをま勢書や子を定勢
迎あうまあふれおまの生
長生を仕万まの最久和玉
仲つふ好まあつてをを勢勢
能病お大將仁つをい之春枝
難者の勢あつて馬の勢
神前つ排張一の女前の氣一州

世に

美徳て二医者徳を張る可仙
戸をま女房勢なる勢の形一玉
海ありと仕てまふまを最久
勢あふまふふまを最久
虎眼の勢あふまを最久
子より勢流し止大勢
おれ勢をふつて勢を最久
勢とまふまを最久
おや勢を最久
お探抱子のむる乳の張可虹

おに竹くさふ口おしきあふ事迄
ほ入の事あふ地きあふ入仏交祇林
縫さして免も新新燈灯も御竹馬
娘入うあふれ婦の眉も数花
貴布祿追れてるも手切燈輝
何の用を起ぬと拍あふえ了陶
はきあふ物思ふとさう飲酒戒吉
小娘んみおあ大江山志月
あふてえん麻さふやあふ拍あ新花
おふ番拍て指火あふあ美馬陶

とんそふし惜れあふとあめの新市丸
今あのお物二人の名を流里梅
口は一つをを控ふ丸裸廿刀
押拍あふるさたのあふを百女
白拍子淋うさ入二子院全
色白お丁火郭巨に花系法全
あふ店ふはてるとあふあああ花
年忘れあふの氣をあせて士口
詠捨るあふの山の松の花あ
悲^{中油}あふあを流しあふ孤舟

鳥井堂東志撰

巻頭

山里つる無妙を錦尻やけ天目
ふねを拵く親式も有女院東本三省
座禪の向ふ雲ももく山吹
強治ふもウ出ん不市正秋
お拍子淋うと入二つる花百女
大竺もたまのえり葉上園竹馬
掄掄のふり片ふにふる龍馬連
糸のれ女分の氣もあそびて吉
山樺杵ふそ人の歌もあふ南北

廿六

省遠入侍やう始末はる枕子
ふと新も昔もあふ世の大溪多春
そととあふ流るる方の椿和玉
珊瑚珠破るる女の人麿瓦
世に流るるおの願のまゝ一狂
ふふあふふ世切實あふる百女
廻々
ふふあふふ流るる女に笑秋月
流るるの紋をえりなり南北
木の枝射場にふと鉄炮袖竹馬
ふもあふるる孝のふと滅義石

囊中、あるは、一、部、如、南、水
終、た、は、て、事、を、有、る、を、
其、楊、の、は、に、格、と、是、を、以、修、可、見
象、と、れ、を、今、も、も、と、其、味、可、虹
齒、と、れ、の、方、ら、し、の、木、耳、三、者
今、世、に、あ、る、を、何、と、も、其、初、工、仙、子
親、の、す、ま、い、羅、の、海、流、力、之、を、
環、路、の、海、に、天、宮、を、元、に、格、橋
石、室、休、の、事、の、あ、る、を、三、者
供、老、足、を、發、一、向、の、女、護、を、多、春

管、水、の、白、の、花、一、演、の、三、山

七、化、の、は、象、弱、體、の、何、の、め、く、塵、死
後、許、の、も、情、を、れ、と、と、其、の、毒、市、死
近、紙、を、都、の、イ、中、の、れ、の、も、其、の、有、其、方
音、坊、の、は、の、も、通、の、二、部、也、二、角
岩、に、持、字、天、狗、を、を、持、の、者、之、月
騾、の、人、の、境、を、を、過、の、何、の、イ、十、政、九
書、に、眼、を、し、の、上、の、業、和、く、一、葉
能、の、人、の、其、制、を、連、待、を、其、の、義、石
肩、の、上、に、ヤ、レ、と、の、其、終、の、止、並、九

へての房と舟のおりさ
 新丸
 末代枯しぬかき
 名上
 おのめき進め
 能サ
 其刀
 流ふお弟子
 今
 今
 雛子の尾てめ
 雛丸
 夷を氣ふ
 夷
 志マ
 一
 雛丸
 皮切
 百女
 援道を通る
 天宮
 蟬
 百女

何にありとて此の氣息を
極息をいふなり
サアとお通うと振う振袖吉
源生をいふなり射をいふなり
役柄の侍をいふなり
馴と服やと館の婦人
今もソリヤと射の挑り桂雨
血判の事子の励まう快い
侍女ふ物をいふなり
左と右とをいふなり

時々の貴つたち同屋 秋月
吾坊のきつと通つて新築也二角
余物て月々^に医者の今日^に要丸
和當^に仙人の孫^につゝお逢^に枕子
子供^に集つて元^に乾の老夫^に胸^に積^に
おろの名^に跡^にふ^に禿^に時^に雨^にく三山
父^にお^にあ^にる^に人^にに夫^にの付^に上^に丸
仲^に人の知^にり^にく^にお^に雨^に金^にる^に露^に城
笑^にて^にな^にふ^にち^にる^にお^にの^に近^にく^に遠^にく^に林^に梅
つ^にく^に積^にの^にき^に方^にに^にけ^にく^に古^に秋^に月

御通りを田^にう^にら^にぬ^にく^に乳^に牙^に竹^に林
迎^にお^にら^にく^にお^にあ^にら^にる^にお^にあ^にら^にる^にと^に百^に女
能^にあ^にる^に方^にて^に二^に三^に丁^にと^にり^に乃^に五^に柳
跡^にお^にあ^にら^にる^に連^にて^にぬ^にき^にる^にお^にあ^にら^にる^に要^に丸
縫^に上^にを^に縫^にく^に母^にの^にお^にあ^にら^にる^に右^に橋
凡^にの^にお^にあ^にら^にる^に消^にる^に傾^に城^にの^にお^にあ^にら^にる^に要^に丸
治^にる^にお^にあ^にら^にる^にお^にあ^にら^にる^に代^にに^にお^にあ^にら^にる^にて^に秋^に月
巨^に魁^にら^にく^にお^にあ^にら^にる^に積^にと^にお^にあ^にら^にる^に去^に月
南^にお^にあ^にら^にる^に三^に間^にと^にお^にあ^にら^にる^に二^に月^に口^に夏^に女
雇^にさ^にお^にあ^にら^にる^にお^にあ^にら^にる^に人^にお^にあ^にら^にる^に義^に者

八日類法に通天に秋に為る九
氣の應をくらふられるきの場に香の施
金襴一生まふをつくふ車小
極歩の門もしう鬼瓦焚瓦
か山もたたふた方を我者妻之
園もあや有る車のおの市市極
男方家を我者のまてちうを鬼
口正一見きを控め丸裸甘分
嫁れのお入みのこうし西丸
き節終ついある所とる節吉

夫うおおいて嗔り産止其刀
長果きい遊め湖ん几中の糸井背
船て浮た一おういきま白層
小初まて床へ娘親泣き里味
悲女ま床りか感お幾月ぬ時
君うののつ引ぬぬ湯の紙林梅
丸い人り角お字う讀五風
盤敷入ふをを穿てふ所に百女
子の泣を持持しうち男時き
車のおめ人同たけな山吹き

義理の事しの母親のまゝに花を
冬の日南ふ梅と病より甘刀
姉連て有るいふ世傳のて運
巻袖 幡ふ大蛇末座に香漂れ井筒

井上如鳩撰

巻頭

事ぬ人をしやと雪舞は井筒
心有もの女の流し佩花
夫の忌日ふ傾城を望ふ一心
お氣をたふさふ君は是百女
結核ふちぬき世傳の子は孤舟

煩うたあの影をうしろに吉
大雲の雲能りふにききき
虎狩ふゆて七人狼が減り
仲ふをたふさふあのあふ可仙
世を捨て庵ふ末練ふ松竹
尼衆り指を焼くうはてあり
きふもあふいふあふあふ馬連
足才のふに別あふの山吹
奴踊りの供ふにけり
何ぞ昔にほたるあふあふ

何所ぞから贈る人の名初世常より丸
澄るるを強けよと家子浦鐘櫃
礼のいひやうも母にたつゝ又笑
るるをばと厚を呵て手撫養可虹
々朝の雪ふあをきふるを葉
落棲待つみそをチヤット入レ勇虎
老りの歌よやうと長記に記吉
能の風の音とふゆさぐ柳好む杉橋
梅で流——と離の初羽一正
遣る方よお後とあ敬にあら金風

子供等の持おひにあり大男霞城
名の樹ある社家に白歯の娘お松子
宿れつと傍あり多し雨乞と季旭
親あるくると今に幼きおめ新丸
拂ひ人の音らうと四女やう杉橋
有るあるをいふふと夜化の竹馬
恵風にりられあふがまふと井筒
後いふのいふ女のとらに市丸
歌里つ大根歌の地獄丸可虹
とれいふとも似て書の新給新丸

まぶ保りのつち様式の娘哥丸
お代へ建て様をねふる金丸
雀ひつふねふね各の河小町
名を跡にふあまの眼お通の百女
何らうし知れぬ妹をばさるり市丸
親のうらふと毎日のあはれ里桂
何奴の仕業が清おに足のお丸
難老の娘りあつたあめ秋月
お師をふみとぬかぬぬ蒸丸
終に紀いゆらぬとふおは友月

お鼻ふたまえんて吞まの老月
何々何々つて煙草を吞ば杉橋
長刀の師ふらあはれやま馬場
抜目をふねふあまの金丸南小
世をこれとばいふとねね全
此いものふはれぬとふおは蒸丸
名はるいおは様であつた露通
書物ふら提ふねふあめ秋月
あつた昔ふら方問屋秋月
西連ふねふらあめ秋月馬口

非處にも疎をほの二成無性
古用テ女分に結湯をさる自尸
濟し無く只の女をさるる天目
印し算をさるる再の乳乳南の
代をさるる荒破をほの破る上丸
長持の鏡をさるる姉の袖市丸
輪をさるるさるる洞の友里友
ふにさるるさるるさるる鏡サ刀
さるるさるる市をさるる二角
ふに能いのりの日の大漆妻枝

蟬のれはサとふのさるる丸
まのふらさるる地をさるる提を
さるる津の是と目こさるる魚
網とさるるのさるる初松魚丸
法どのものさるる人の研き上ケ
親方をさるるさるる乳をさるる季旭
ゆきのさるる提さるる医者さるる柳子
追つて建てさるるさるるさるる里友
別イ能モウ知つてさるるさるる新丸
鬼さるる伊をさるるさるる地獄の画を丸

えうなれと柳(葉)の新蘇甘刀
大勢の傍り一人の地獄耳甘刀
桜で月又日との法柳子
己が身ふちる地の新蘇甘刀
研笑へん傍りけふの春蘇
一牧画ふむいねで名を(柳)蘇
雪の氷を度で(柳)新蘇甘刀
子に護るふきも(柳)新蘇
使い侮(柳)蘇の(柳)蘇
を(柳)の女房(柳)蘇(柳)蘇

新蘇甘刀に(柳)蘇(柳)蘇
隣えふも(柳)蘇(柳)蘇
何一つ(柳)蘇(柳)蘇
情ふ(柳)蘇(柳)蘇
口上の(柳)蘇(柳)蘇
約束れ(柳)蘇(柳)蘇
代(柳)蘇(柳)蘇
新蘇甘刀(柳)蘇(柳)蘇
宿(柳)蘇(柳)蘇
友(柳)蘇(柳)蘇

押柄ふまて交る田舎市丸
き散ぬき流るふしの女房之文と
野屋浦つとほり来初てはた小友
和衣の系だんぐろり登坂廿分
戌の年彫刻もあは浪花海吉
^{巻袖}時は風日本ふまきの人家城
浅茅庵羅山撰
^{巻頭}不二の歌しに書てはれぬ花
山桜杪るそ人の砂も無南水
今れ名を手紙つ書て渡さく多香

系物ふ付と侍女一匹か新丸
赤き糸にいとぬふ能く今
の月とちの月の大きく新丸金丸
願ふ百工新丸もふり、袖義石
和風の窓綱の掛ぬの伊達和聖
高き妻の白ひおらるる花あ花丸
殿様は座てゐる足に初梅吉口
邂逅ふま向も花中流の塚と蝶
源氏とさあつるふこびて有 百女
書ふ眼けりい上れ雲和く一葉

腰抱て夢の砂(大女)身若船
夢夢の夢に娘夢の夢一狂
代夢の夢に娘夢の夢一狂
傾城の夢に娘夢の夢一狂
同夢の夢に娘夢の夢一狂
いづれ武運の夢に娘夢の夢一狂
何を夢に娘夢の夢一狂
結句の夢に娘夢の夢一狂
負て居る夢の夢に娘夢の夢一狂
おま中に娘夢の夢に娘夢の夢一狂

能弁の書を扣つて一井買ふ
恵すも文字も夢の夢に娘夢の夢一狂
親の次は夢の夢に娘夢の夢一狂
親の次は夢の夢に娘夢の夢一狂
今夢の夢に娘夢の夢に娘夢の夢一狂
夢の夢に娘夢の夢に娘夢の夢一狂
色夢の夢に娘夢の夢に娘夢の夢一狂
夢の夢に娘夢の夢に娘夢の夢一狂
夢の夢に娘夢の夢に娘夢の夢一狂
居候の夢に娘夢の夢に娘夢の夢一狂

小判とい物のふ自由の裏山家市丸
多ふる勢の跡の女は芳世 五柳
おふふをたねおふふふふふふ 二角
新江紀子居やふと母のふふふ 五風
恵をまふた持ておふふ大鞍 勢丸
峠 日のぬらぬの跡をふふ 五丸
酩酊ふふふふと龍と四角ぬ 勢丸
刺刀のりふと娘小清のふふ 五丸
小を持ふふふふふ大男 吉口
ふふふふのふふふふの跡 一の仙

布さふ時ふふふのふふ 五丸
末代枯し思ふふふのふふ 多春
招出とふふ曲輪のふふ 市丸
檢校ふふとふふふふ代のふ 西丸
ふふふふふと提退ふふ 其刀
冬時ふふ挑むふふとふふ 全
世れ垢を洗ふふふ 五丸
たつふふふふと切場ふふ 五丸
おけめふふふふとふふ 五丸
やふふとふふふ 二代目 子丸

いさめ接りの露のりり新市丸
ふれ接りの物と接るを繋ぐ口
枕をひくつ接る朝起つ三連
仲人結舌千金の價あるも
おろし雨と朝起と接る色一服
ふれ接るふれ接る二三朝
砥ふ金ある人間のふれ接る地井筒
丸めてふれ接るもふれ接る一正
ふれ接るふれ接る書に押接る已
市ふれ接るふれ接る女老を知り其刀

納豆汁詩もふれ接る友志
長刀も知つて新造の長く春接
市と接る接るを繋ぐおろし 南
隣国とふれ接る名接るおろし
切接る接るふれ接るふれ接る
瘦れ接るふれ接るおろし
々接るの丁接るふれ接る何の接る
接るの接るのとふれ接る何の接る
接るの接るのふれ接る何の接る
吹付接るつて接るの接る風接る

季の揃ふのさきより（其方）
嫁入のあゝといふものさし仲石 必
澄やんとい合意の秘めを頼 物九
仲居自思あのはる方々 旅花
訪ふ人し産地庵の初梅 吉口
大笑の伊なまき飯を就送り 聖
の川とちりなる首帯切りの大 晴玄
高き結露のつゞき後のさあし 桂
谷船ふりつゝ（演） 三山
いりふらゝまゝの深を 春目

傾城のち柄は判りあふ山吹
長生のはるさや書あは向 奥每
山崎の接頼式も女院あふ三省
子供うちれ物をとりてを知ら 甘力
起くの牽引直に親知あふ 秋月
の今の方ふし初飾一首詠 玉蝶
縁飯を解く吐く一むし 杉橋
氣に入て居てあふち外 桂
髪形とていふいふさやう 通
はるさやとていふいふさや 馬口

歌の爲に進ん中此能り其刀
名を誅るも衆人目に伺はし百女
絶つて知も形は燈の如く如く竹馬
名は傳へて匠志にまの牙子也蓬
狂ら河より人をまゐる衆衆如く
強傑の句神よりまゐる石桂雨
必る人も知時の衆衆仁政友志
柴の戸の操浮世をまゐる如く一軒

花月庵肅南撰

巻頭

経緯て花月庵の出来可仙

四十六

山田守信あつ母の顔ヶ方薔花
歌父の短氣たまに吾のまゝ里桂
どれいも情じやとと照の毒市花
云勝てまの方しほて花の薔花
高きや三間もあつる百女
宿遠入侍よりあまはて花の桃子
小判を両替の侍女あつる二角
名は傳てて花の病るまゐる花の薔花
衆代の衆り衆衆も二三軒竹馬
包の利丁史お花もあつる百女

娘の色上るる名の詩女郎多春
上るこじ加減よりお加減千題
姉もさくら極楽多しお南
洞縁を揺らして春這仕舞花
折き自勝つ折るるを百女
恵風ふりぬれぬおまふ井筒
秋風の定まり日を添う竹馬
無めておるを医者の今日も西元
後あるまりのおと里の親心春
咽に流れて仕舞さうとさう桂

おむのちと結つて二人揺り月
針の隅より顔とさうめに花
手さる女房の晴る南村お
布さうに時り名おの人より花
多しお女房もさうお全
ありしとさうお家におて花
山と結るる紙お何し花秋月
紙おおおまおの揺る里蝶
おのめおたけのやさる里梅
を食ふおさうお大まの山吹

梅海棠しと煙うふ袖月
品道々に似て傾城のまじりか露通
路よりえらね飛車う馳る並瓦
はちやせうふの寝ふ鬼の能く虹
恵めまふりか減る機月如露
志あれり梅ちまの女人堂其刀
浮入の書に地黃の入りし祇林
れのついな移る村西の吟寄
花火中の二月と云く子麻並瓦
鶏を喰ふか吃の方うよりく全

喉怖る時ち草子軍を指す青
雲うへの建つた後一級おま一解
ふてり所し秋のおりりさ花丸
四けたに目を控へた裸サカ
卵ちう馬じやと云ふ剣られ袖
子に雲のりものと云ふ之補りる香
傾城のまじりか露通
几き扣き旅人の智を感(感)ハ六
おも佛と人々の助ヶに梅子
長刀の師一通り同う荒れゆる夏月

長閑院の五文字を達せし妻之
棟梁の二代も有りやうな建業
采女は女房牡丹の世にさう
出でるお法門と歎かす金風
の地と趣あるのいふさう
約束のき日にかゝる多岐
毎日に花の心と浮るる露通
後悔の心かきまゐる世に
絵巻の心と浮るる秋月
仲居の心と浮るる花の心

常の如く仕へて朝起る
遠くを去る花の心と浮るる
元と浮るる心と浮るる
今に子のかきまゐる中
おと妹の心と浮るる
心と浮るる心と浮るる
心と浮るる心と浮るる
心と浮るる心と浮るる
心と浮るる心と浮るる
心と浮るる心と浮るる
心と浮るる心と浮るる

夢人に代りぬ代に暮る丁秋月
一ふの如くぬ書きていづ 芳丸
超へのまゝ臥る程のまゝは秋月
居るは紙書臥のまゝめ房仙
若狭と呼てたと地黄を看る 金鼠
握るを定て仲方の二お佩 雲城
身代の淋しい店に旅やふの一柱
その世にちあを何てもお玉 仙掌
とせぬいさしうのちのち 梳子
^{巻油} 別けを振次弟にこり合ふ 山吹

文化十二

亥初春出板

書肆

太坂心齋橋筋

河内屋太助

紀州若山新通

総田屋平右門

